

なぜ日本人はキリストの 救いからもれるのか

— 日本人の価値観とキリスト教の精神 —

水 野 孝 典

要 旨

なぜわが国においてはキリスト教が広く普及しないのか。キリスト教の精神との比較を通して、日本人の死生観、価値観、宗教性を考察する。

他界観はその個人が所属する文化世界に一般的に見られる諸々の不安を埋め合やす映像である。他界観は価値観を規定する。また逆に、他界観が文化世界の反映であることを考慮すれば、価値観が他界観を規定すると言い換えることができる。

日本人に多く見られる多神教的、汎神論的思想は「絶対者」の欠如の現れである。今日では日本人の原宗教の観さえある佛教も、土着の死霊観や、帰属意識の強い祖霊観と習合したためによく根を下ろした。また、檀家制度により佛教は「家ごとの宗教」となり、家族全体として寺に所属する社会制度ともなってきた。このような集団主義から個人が主体的に抜け出すことは極めて困難である。

はじめに

ザビエル以来のキリスト教の日本布教はどのような経過をたどったのか。歴史書を繙けば、今日までのわが国におけるキリストの福音伝達が困難を極めたことは容易に知ることができる。この宗教の普及を阻んできた要因としては、わが国の自然や地理的環境、風土や歴史的條件、あるいはわが国に固有の在来の信仰形態や、仏教など六世紀に早くも伝来した先行外来宗教の影響、そしてまたその時々政治的事情など、多くのことが考えられる。また一方、外来宗教としてのキリスト教倫理そのものの正確かつ熱心な伝道がこうした諸条件を

有するわが国でどれだけ効果的に行われてきたか、という方法論の問題もある。しかし、いずれにせよ、キリスト教の精神と日本人の死生観や価値観、宗教性を比較すれば、この両者のあいだには根本的で、あまりにも大きな隔たりがあるのではないだろうか。あるとすればこの隔たりはいったい何によるものであろうか。

このように本論考で私が問題とするのは、なぜわが国においては世界宗教たるキリスト教が広く普及しないのか、換言すれば、日本人の価値観とキリスト教の精神の比較を通して、なぜ日本人はキリストの救いからめれるのかを明らかにすることである。すなわち、キリスト教という鏡に日本人の死生観や価値観、宗教性を映し出すとともに、日本人の死生観や価値観、宗教性からキリスト教の精神を観察しなおしてみることが本考察の主眼である。

第1節 キリスト教の他界観

キリスト教では、生と死の問題はどのように考えられているのであろうか。

まず、キリスト教信仰の原点は、処女マリアが神の精霊により懐胎してイエスが生まれ、このイエスが、あらゆる人々の罪過を一身に引き受けて十字架上で磔刑になり、死後3日目に復活した、というものである。このようにキリスト教においては、イエスの出生における奇跡と死後復活の奇跡が重要である。しかし、もともとイエスは神のひとり子であり、この愛の神は世の人々の罪過を取り去るためにひとり子を世に送る（贈る）という愛を示したのである。イエスは死を超越している。キリスト教においては、死は人類（＝アダムに起源を発する）の罪の結果としてこの世に入ってきたと考えられている。イエスはこの死の力を無力にする権威をもっている。イエスを信じるものは、「死んでも死なない」のである。人は必ず死ぬにもかかわらず、イエスへの信仰によって、死後に大いなる希望をもつことができる。すなわち、イエス・キリストへの信仰によって死後復活し、神の国に入ることができるのである。これは単なる「気休め」といったものではない。たしかに、イエス自身も「神の国は、見よあそこにある、あるいは、ここにあるといったものではない。神の国は実にあなた方のなかにあるのだ」（ルカ17. 20）と述べているが、この言葉におい

ても、イエスの差し示した「神の国」は決して抽象的なものではないことがわかる。新たな体を備えて復活するのである。「神の国はあなたがたひとりひとりのなかにあるのだ」という言葉は、神の国がほんとうはどこから始まるのかということを暗示している。イエスがこの世に来たことは、すでに神の国が来たと等しいのである。そして「わたしはよみがえりであり、命である。」(ヨハネ11. 25)といわれるように、死人のなかから最初に復活したものとしてのイエスは、奇跡のはじまりなのである。

しかし、死後のことは、生きている人間は実のところほんとうは何も知らない。そこに不安や恐怖が生まれる。しかし、人は生まれる前のことについては、不安や恐怖を感じないのであろうか。パスカルは適切にも「この無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖させる」と「賭けの必要性について」(『パンセ』)のなかで言っているが、彼は生前と死後の両方の無限の空間の永遠の沈黙を恐怖しているかのようにみえる。「無限の空間」を「無限の時間」あるいは「永久の時間」と置き換えてみればいい。そして、またパスカルは「順序。私には、キリスト教をほんとうだと信じることによってまちがうよりも、まちがった上で、キリスト教がほんとうであることを発見するほうが、ずっと恐ろしいだろう。」と、同書のなかで告白し、キリスト教信仰への「賭け」を説いている。「死後」を破滅や虚無ととらえるか、イエスとともにある神の国への復活ととらえるか、これはひとりひとりの自主的な選択にかかっている。しかし、こうした場合においても、イエスは「天国は幼子にふさわしい」といい、あるいは、「天国は貧しい者たちのものである」と教え、限りなく広く深い神の愛を示している。このように、キリスト教にあっては、「他界して別の世界に去る」というよりも、この世に死んで最後の審判を受け、イエス・キリストへの信仰によって神の国に復活するといえるだろう。

第2節 島国日本の風土と文化

前田護郎は、島国の文化について、日本は島国であり、世界の文化史で島国であるということが重要な位置を占めた例としてクレタ島をあげることができるという。クレタ島は紀元前一千年代に地中海に栄え、この島の文化はクノッ

ソスの王宮やその他遺跡の考古学的発掘によって明らかになった。そこには当時の文化国家であったハッティ（ヒッタイト）王国やエジプト、その他近東諸国の文化が移入され、融合した様子が明らかにみてとることができた。周知のごとく、クレタ島はホメロスの雄大な叙事詩の舞台であり、それに関連して、地中海沿岸各地との交流の模様もうかがうことができるが、特徴的なことのひとつとして、家や町が壁を重視しない開放的な構造を持つという点をあげることができるという。これはギリシア半島のミュケナイと異なる文化の型であり、海が島全体の防備をなしたため、島の内部が比較的平和に保たれたからであることを指摘している。そして、このような島の性格、つまり、四方の海から渡来する諸文化の融合と、海の防備による内部の平和は、現代におけるイギリスに例をみることができるという。その言語的・文化的例証あるいは史的例証として、英語がドイツ語などを含むゲルマン系と、フランス語などを含むラテン系との語や文法を持つこと、ナポレオンやヒトラーの侵攻を海で防ぎえたことなどをあげている。家の構造も欧州大陸のそれと比べれば開放的なところがあるという。こうして、大陸から海でへだてられ、しかも大陸の諸文化から遠く離れすぎずに気候温和で生産力に富む場合、島国は高度の文化を示すものであると結んでいる¹⁾。

たしかにわが日本列島をふりかえってみれば、今から数十万年前の洪積世、日本は大陸と地づきであったが、大陸と分離してからも、わが国へは古来中国大陸や朝鮮半島、あるいは南洋の島々などを通じてさまざまな文化がもたらされ、島国という風土的条件のなかで独特の思想や文化が形成されてきた。しかも、この島国は豊かな産物に恵まれていた。石毛直道も指摘するように「日本列島は大陸から分離して以来、太平洋岸、日本海岸ともに暖流と寒流の両方の回遊魚が訪れる、世界有数の好漁場にとりかこまれた国土となっている。北西ヨーロッパなどにくらべたら、はるかに長い春と秋をもち、四季それぞれの産物に恵まれている。」このため「野菜、山菜、魚への比重が大きい食生活を伝統とした²⁾」が、これは「わが国が多様な食料資源に恵まれた環境にある」からである。温暖多雨気候帯に位置する日本列島では、古代人の狩猟、漁労、採集の各生活パターンを通じて、彼らが日々生活する直接の舞台が豊饒の大地であったということができる。そして、神道の根源もこの豊かな自然の恵みの

なかにあったと私は考えたいのである。また、四季折々に山の幸、海の幸に恵まれ、季節が繰り返し繰り返し巡回する風土では、ユダヤ教やキリスト教にみられる終末観や断絶観、仏教の末法思想などは生まれる余地がもともとない。逆に、神道には生成発展することを期待する連続観や上昇史観があるのは当然の成りゆきであるといつてよい。

第3節 神道の世界観

ところで、旧約聖書の唯一絶対神は全世界を創造したが、神道では大きく事情が異なる。『古事記』は「天地はじめて開けし時、高天原に成りませる神」で始まるように、神が天地を創造したのではなく、何かが始めにあってそれが働きを示し始め、天と地に分かれ、その天に神が自己顕現したことになる。つまり神道では、現実の存在世界は既存の混沌という姿において前提されているのである。そして、その混沌のなかから天と地が生成し、やがて天に複数の神が自ら出現し、天地を修理したり、固めたりなどし、この意思を継いでイザナギ、イザナミの二神が大八嶋国と多くの神々を生んだのである。この神話から、上田賢治は「日本人は物と霊とを区別していなかった³⁾」とする。そして、「本来の日本語による『もの』は物の怪であったり、物の気・物の化でもあるのである。しかし、総てが霊的存在ではあるといつても、総てが神であるわけではない。本居宣長は「尋常ならずすぐれたる徳のありて可畏きものをば神とは言ふなり」と述べているが、これ程優れた定義はない⁴⁾」という。また、これと同時に重要なことは、「日本人が祖先を神として祭祀と共に、その命の発端を自然と結び付けているという事実⁵⁾」だといひ、その代表的な例として、天皇は天照大神の天孫以来の血統を受けた存在であるという信仰が生きていることを指摘している。さらに、神道は純粋な多神教であり、あらゆる存在が霊的働きを持つと信じられ、神も人格性を備えた存在として信仰されてきているという。

この多神教は真理が同時に多数存在することを意味し、唯一絶対の神も、従つて絶対的真理も存在することはない。また、この世以外にあると信じられる世界（他界）について、神道では、天国も地獄も存在しないと考えられている。

次に上田が指摘することは重要である。すなわち「古代から現代に至るまで、日本人が死後の世界について深刻に考えて来なかった理由は、他の宗教がこの世以外に理想の世界を求め、そこに安住の地を期待するのに対して、彼らがこの国での子孫による生の営みに強い関心をもっており、子孫が祭れば何時でも靈魂としてこの世に訪ねて来ることが出来るという信仰を持っているからである⁶⁾」つまり、日本人にはこの世と隔絶した他界観がないというのである。これは、祖先を神として祭り、その命の発端を自然と結び付けるなら、当然の帰結といえよう。他界すれば子孫にとって自分自身が神となる日本人の発想のなかに、豊かなこの世以外に天国を求める必要もなく、また恐ろしい地獄を敢えて創造することもいらぬわけである。靈魂の往来が可能な神道の世界では、この世とあの世はいわば地つづきになっているのである。これはまた、南島の彼方に遠い祖先を偲ぶ風俗や信仰にも相通ずるものがある。神崎宣武も、「神道は日本人のもっとも古くからの信仰形態を集成したものであり、その中心思想は、一つには自然崇拜にある⁷⁾」と述べている。神道における祭祀の多くが農耕儀礼と密接に結びついたものであることをみれば、これは明らかであろう。またさらに、神崎は「各時代、各地にほぼ共通してみられるのは、氏神への帰属、すなわち土地を開いた一族郎党の祖霊への信仰の深さである。伊勢神宮の皇大神宮（内宮）への信仰が集まるのも、かつて日本が天皇家を中心とした国家体制にあった時代には、皇大神宮を日本人の総氏神として祀ったからにはほかならない⁸⁾」と述べている。

『東方見聞録』を著したマルコ・ポーロも日本人のことを「彼らは偶像崇拜者である」と断じている。天地諸神、八百万の神々が信奉されるのである。このために、前田護郎も「日本人の多神教的かつ汎神論的な考えのあらわれであり、絶対者の欠如でもある。無の観察はあるが死に至る徹底的な無からの救いによる生のよろこびに欠ける。ここにもキリスト教が何を日本にもたらすかの問題が内在するといえよう⁹⁾」と問題を提起している。

第4節 仏教と祖霊信仰

日本人が古来、新来の文物に強い好奇心を示し、それらを取り入れ、同化する

る才のあったことは多くの識者が指摘するところである。しかし、新奇なものを取り入れるときにも、魂は旧来のまま保持した。明治初期にヨーロッパの文物を必死になって学んだ際にも、和魂洋才は貫かれた。すなわち、魂は日本人のまま、西洋の学術を取り入れようとしたのである。今日ではあたかも日本人の原宗教のような観さえする仏教にしても、6世紀前半には、日本人にとって外来宗教にはかならなかった。その仏教が真に民衆のなかに根ざすのは鎌倉時代のことである、と神崎はいう。そして、「その信仰の形態は、いずれも、まず祖師（宗祖・派祖）を崇めるものであり、それによって宗派を明らかにした。そして、祖師に対する信仰は、一般に及んで家父長を尊ぶ家族制度を強化することにもなった。つまり、民衆のあいだで祖霊の仏教祭祀が盛んになったのである¹⁰⁾」とする。ただ、「それ以前に、死霊がとくべつの力をもっており、生者に影響を与えるものとする畏怖観念が潜在していたことは事実ではあろう。ただ、その死霊が再生して現世と交流する、という思想はかぎられてくる。それが、日本では仏教の供養思想をもって回施（回向）することで、先祖代々霊が明確に体系化された。仏教が日本に浸透したのは、土着の死霊観、祖霊観と習合したからにはかならない¹¹⁾」のだとする。つまり、仏教にしても、旧来の考え方とよく合致したからわが国に根を下ろしたのだとされ、その後、神仏の習合がはじまるが、それも両者の根底に共通の機軸が見いだされたからなのであるという。しかし、あくまでも日本人はカミ・ホトケに対してよりも、祖霊に対しての帰属意識が強く、その観念の薄い外来の宗教に対しては許容しにくいのであろう、と結論づけている。こうしてみると、唯一絶対の神を信仰するキリスト教などはいかに日本人の信仰構造からほど遠い宗教であるかがわかる。神崎は、「神さま、仏さま、ご先祖様の三位一体の観念こそが私ども日本人の宗教観であるというのがふさわしく、これをもってニッポン教としよう¹²⁾」とも述べているが、これこそ日本における多神教形態の最たるものといってよい。

第5節 集団の倫理が支配してきた日本

江戸期におけるキリスト教封殺のための檀家制度により、仏教は「家ごとの宗教」となり、国家の安泰を保障するひとつの社会制度として利用された。こ

の制度は、寺が一戸の家ごとにキリシタンでないことを証明し、請け負う代わりに、檀家がその寺に所属し、財政的に寺を支えるしくみである。このため、この制度創設以降、日本人は生まれながらにして「仏教徒」となることを余儀なくされてきたのである。わが国における仏教は、言うまでもなく個人によって主体的に改めて選びとられた宗教ではない。個人が生まれる前から決められ、家族全体が社会制度として寺に所属するしくみとして今日まで続いているものなのである。

このことは、そうでなくとも神崎が、鎌倉時代の仏教における祖師崇拝が家父長を尊ぶ家族制度を強化することになった、と指摘するとおり、檀家制度以降、いわば「仏教社会制度」とよんで然るべきしくみが、家族を中心とする集団倫理、集団志向をさらに補強することになったのである。これと同じ例としては、明治の王制復古により国家神道が台頭し、廃仏毀釈によって仏教が退けられたとき、仏教による家族の統制に代わって天皇家を頂点とする家族中心主義の典型が示されたとき、本質的には変わりのない結果をもたらした。隅谷三喜男もいうように、親兄弟をすてて赤の他人のために働くというようなことは、「禽獸」のたぐいのすることであって、人間の道ではない、というのが伝統的人間観であったためである¹³⁾。

家族という小集団のなかで培われた倫理のひな型は、長じて一步外に出ると、近隣社会、学校、やがて企業、組織、団体、そして日本社会全体という、より大きな集団倫理を志向する世界のなかで有効に生かされていく。しかし、この集団の倫理が自己矛盾を感じ、挫折する機会はないのであろうか。

日本人の楽天的で柔和、従順な国民性は、島国という地理的環境や四季が転変する自然的条件と深い関わりがある。すなわち、周囲を海で囲まれているため外敵から守られたという出来事は、すでに鎌倉時代、二度にわたって押し寄せた元の大軍を水際で防ぎ得たことでわれわれは経験している。また、気候温暖で、豊かな山の幸、海の幸に恵まれ、工業資源こそ少ないが、大地も耕せば豊かな実りをもたらしてくれる国土のなかで、年々歳々、春になれば草木は新たによみがえり、四季折々に百花が咲き乱れ、鳥が歌う。仏教的「無常観」も自然なかたちですんなりとよく融けこんでいる。こうなれば、まるで日本列島は、現世そのままに天国であり、極楽であり、浄土ではないか。自然崇拝的、

自然宗教的神道が芽生えた風土には、絶対者もなく、終末観もなく、祖霊とともに安住する穏やかな人々が平和に生を営んでいる。

しかし、こうした構図のなかに日本人が旧来の生活形態や行動様式、思想をもって安住できる時代は、基本的には昭和20年（1945）をもって終わった、と私は考える。そして、この時期はキリスト教との関わりでいうなら、日本への布教の第2期と第3期の移行期にあたると、私は整理したい。すなわち、第1期はいうまでもなくザビエルが渡来した1549年から鎖国の完成する1639年に及ぶ90年間。第2期は明治維新の1868年から1945年までの78年間である。この第3期は時間的にはまだ戦後の50年間である。この第3期は、おそらく従来 of 時期とは大きく事情が異なり、未来永劫にわたって、日本列島が国際化の波に洗われながら世界のあらゆる国々と交際していかなければならない時期である。

第6節 日本人の宗教性

久保田展弘は、『日本宗教とは何か』のなかでつぎのように述べている。

「日本をその典型として、いま、アジア各地はそのオリジナリティーを急速に失ってきているという現実である。とくに、この7、8年のあいだ、痛感することは、その国の農耕儀礼が消滅しかかった国は必ず独自の文化・思想を失うということである。¹⁴⁾」

これは重要なことである。とくに、わが国の思想的支柱となってきた神道の今後の盛衰に関わって、極めて深い意味をもつ。すなわち、集団倫理が根底から破壊されるおそれがあるからである。支柱がゆらげば、仏教的思想や儒教的思想、またそれらにともなう諸儀礼も動揺する。そして、その兆候はすでに現れてきている。夫婦の離婚の増大や親子断絶など家族の絆の破綻、地縁的地域共同体の崩壊、終身雇用制の見直しと「会社人間」からの脱落、国家意識の希薄化などがそれである。ただし、それに代わって近代的な個人主義や個人的倫理の台頭が十分うかがわれるかどうかとなると、なお問題がある。

ところで、前田護郎が、日本人について「無の観察はあるが死に至る徹底的な無からの救いによる生の喜びに欠ける¹⁵⁾」と述べ、また上田賢治が、「死後の世界について深刻に考えて来なかった¹⁶⁾」と述べたことは、いずれも先にみ

たところである。一方、鹿嶋春平太は、「日本人は、このように形而上理論が希薄でありながら信仰心は厚い¹⁷⁾」と述べている。つまり「日本人は、その形而上理論は単純だが依然として見えない存在、見えない世界への期待を大いに抱いている」というのである。

では、この目に見えない存在、信仰の対象とは何か。神道の世界には絶対の神もなければ、終末観もないが、日本人にも絶対を求める気持ちはないのだろうか。「神さま、仏さま、ご先祖さま」と日本人が手を合わせるとき、彼らの心の奥には何が見えているのだろうか。あるいは、何を見ようとしているのだろうか。日本人は口と心では神仏と祖霊の名を唱えながら、その実、自分が何に対して祈っているのかを知らないのではないだろうか。

第7節 他界観と宗教性及び価値観

生命あるもの、特に精神的な存在である人間には日々多くの不安がつきまとう。その最たるものは、意識的にせよ無意識的にせよ、生命の果てのこと、つまり自分が死んだらどうなるか、ということにまつわる不安である。この不安は、人それぞれに死後観、すなわち他界観を生み出すが、この他界観は個人の創作である以前に、彼が属する文化世界の反映である。そしてまた、他界観は死後にまつわる不安とつりあい、いわば互いに補いあっている。換言すれば、特定のある文化世界に特徴的に見られる他界観は、その世界に所属する人々の死後にまつわる不安を埋め合わせるための映像なのである。(ここでは、ただ映像とだけいっておきたい。) だから、不安が大きければ大きいほど、他界観は壮大なものとなろう。

宗教はこの不安から人々を救済するために生まれた。だから、文化世界の反映でもある諸宗教は、それぞれ独特の他界観をもっている。しかし、宗教がなくても他界観は存在する。つまり、人間があるかぎり、人間のあるところ他界観は成り立つのである。

この他界観は価値観を規定する。しかし、他界観が文化世界の反映であることを考慮すれば、逆にまた、価値観が他界観を規定すると言い換えることができよう。つまり、他界観が価値観を規定するというのは、死後の存在をどう考

えるかということが、生のありかたを規定するということである。もちろん、死は容易には思惟しえない。にもかかわらず、生ある人間は死、あるいは死後を思惟するのである。そして、その死後をどう把握するかという問いに対する回答こそが、その個人の生き方に反映するということである。というよりはむしろ、生き方そのもののなのである。つまり、個人の価値観とは、その人の他界観が社会的行動様式として変換されたところの規範であり、尺度であるということである。

日本人は今日までついに絶対者と出会うことがなかった。この出会いは、仮に民族や集団の倫理を媒介にすることがあったとしても、結局は個人的で内面的な究極の体験、あるいは徹底した思索を経た確信がなければ生まれるものではない。そうでなければ、すべては相対的なものである。形而上的な思索を徹底し、個人的・内面的に把握し、深めることがなければ、絶対者との出会いはついに得られることはない。言葉を換えるなら、深刻にあの世を思索することがなければ、結局はすべてなにもかも中途半端に終わるのである。何かが起こっても、喉元過ぎれば熱さを忘れ、過ぎ去ったことは気にも止めず水に流すことになる。絶対の神は知らないが、数多の相対的な神仏と仲良く折り合うことは得意な国民なのである。

結び なぜ日本人はキリストの救いからめれるのか

神道と仏教はわが国の社会風俗の表と裏のごとく一体化して風土のなかによく融けこんでいる。しかし、キリスト教は、戦国時代の終わりごろから江戸時代初期にかけて、多数の殉教者を出しながらも急速に一時は約70万人の信徒を獲得する勢いを見せたものの、信教の自由が保障されている今日でも当時の最盛期の教勢を回復していない。前田護郎も「戦後は外国の宣教師の多くが日本の復興はキリスト教的民主主義からととなえ、国内の人々も敗戦の苦悩からの解放をキリスト教に求め、いわゆるキリストブームが出現した。しかしそれも束の間、現代教会は教勢拡張を問題視している¹⁰⁾」と述べている。

キリスト教の母胎となったユダヤ教は日本人の宗教性からはたしかにあまりにも隔絶しすぎている。天地万物の創造者たる唯一絶対の神を奉じ、この神の

道徳的な律法に従い、選民を認め、終末を待望するという信仰は、神仏と祖霊混交の徒にはまったく受け入れ難い。

イエスの神は愛の神であるが、絶対者としての神であって、相対的な神ではない。だからこそ、心と精神と思いを尽くして神を愛さなければならないのである。イエスの説く神の愛は自発的で原因がなく、価値創造的であり、愛の対象である個々人の価値や功績に無関係で、神の側から神との交わりの道を人間に開く。例え既成宗教が日本の隅々まで根を下ろしているとはいえ、このような愛の宗教が浸透しないのはなぜか。

隅谷三喜男は、「自分が人間であるとまったく同様に、他人も生きる権利をもった人間であるという思想は、当たり前のように、日本人にとっては驚くべき発見であった。それはヒューマンイズムの名で、西欧近代思想の一環として輸入された思想であり、とりわけ日清戦争前後からの近代社会の形成のなかで、キリスト教によってエネルギーを補給された思想であった¹⁹⁾」と述べているが、わが国におけるキリスト教の布教にともなう試練は、裏返せば、わが国民主体化の、そしてまた個人主義の成長と発展にとっての試練でもあったといえることができるのではあるまいか。

戦後、新憲法が制定され、民主主義の世になったとはいえ、なお個人主義は未熟であり、個人の内面の倫理より、集団全体の価値観に従って行動を律することが多い。従って、家全体の宗教である仏教の一派から個人的にひとり抜け出してキリストの受洗を受けるなどということは、親子の縁を切るに等しい勇氣を必要とする。常に周囲と和し、協調して暮らすことに快適さを感じてきた日本人にとって、宗教的転換は、まるで日本人であることをやめ、あるいは出家するような厳しさをともなうものとして受けとめられている。あえてこのような孤立の道を選ばずとも、イエスの説く愛の教えは、他の多くの宗教の教えと同様に、相対的に取り入れることで十分折り合っていると考えているのである。そして、折り合っているとすれば、敢えて家族や地域の共同体から孤立してまで改宗をする必要はないという結論になる。

註

1) 世界の名著第12巻『聖書』中央公論社より前田護郎「聖書の思想と歴史」 45,

46頁

- 2) 佐原真編集『豊饒の大地』集英社より石毛直道「食卓の風景の変貌」 50, 51頁
 - 3) 『世界「宗教」総覧』新人物往来社より上田賢治「神道」 335頁
 - 4) 同335頁
 - 5) 同335頁
 - 6) 同336頁
 - 7) 神崎宣武『神さま仏さまご先祖さま』小学館 15頁
 - 8) 同15頁
 - 9) 世界の名著第12巻『聖書』中央公論社より前田護郎「聖書の思想と歴史」 48頁
 - 10) 神崎宣武『神さま仏さまご先祖さま』小学館 16頁
 - 11) 同16, 17頁
 - 12) 同18頁
 - 13) 隅谷三喜男『日本の歴史』22巻 中央公論社 208頁
 - 14) 久保田展弘『日本宗教とは何か』新潮社 273頁
 - 15) 世界の名著第12巻『聖書』中央公論社より前田護郎「聖書の思想と歴史」 48頁
 - 16) 『世界「宗教」総覧』新人物往来社より上田賢治「神道」 336頁
 - 17) 鹿嶋春平太『聖書の論理が世界を動かす』新潮社 188頁
 - 18) 世界の名著第12巻『聖書』中央公論社より前田護郎「聖書の思想と歴史」 52, 53頁
 - 19) 隅谷三喜男『日本の歴史』22巻 中央公論社 209頁
- (みずのたかのり 大宮町教育委員会教育次長補佐)